Le Premier Homme の形成過程

松　本　陽　正

構成

(1) 着想時期
(2) 節目としての53年
(3) 執筆時期
(4) 53年以前の構想—「貧しい少年時代」との関係
(5)『裏と表』との関係
(6) カミュにとっての『裏と表』

1

Le Premier Homme は未完の草稿であり，草稿にすぎぬ原稿の形成過程を探るのも奇妙な話だが，今回は *Le Premier Homme* の形成過程を辿りながら，この未完の遺作がカミュにとってどのような意味をもつ書であったのかを検証したい。

カミュの創作ノートを兼ねた『手帖』に，*Le Premier Homme* というタイトルが初めて現れるのは，1947年6月の日付に遡る。カミュは作品構想を次のように認めていた。

Sans lendemain.
1re série. Absurde : *L'Etranger* — *Le Mythe de Sisyphe* — *Caligula* et *Le Malentendu*.
2e — Révolte : *La Peste* (et annexes) — *L'homme révolté* — Kaliayev.
3e — Le Jugement — Le premier homme.
4e — L'amour déchiré : Le Bûcher — De l'Amour — Le Séduisant.
5e — Création corrigé ou Le Système — grand roman + grande méditation + pièce injouable. (C2, 201)

しかしながら，ロットマンによれば，この「第三の系列—『審判』—Le premier homme」という部分は『手帖』の原稿にはなく，タイプ化された時に付け加えられたものだという[1]。カミュは『手帖』の第七ノート（51年3月から54年7月）までタイプ化させているが，キーヨによれば，『手帖』のタイプ原稿をカミュがキーヨに渡したのは，1954年である[2]。したがって，54年よりも少し前あたりで，この記述が付け加えられただろうと推測されるのである。

では，実際の着想時期はいつなのだろう。1953年になると，残された遺稿と同じ構成の次のような覚書が『手帖』に初めて現れてくる。

Roman. 1re partie. Recherche d'un père ou le père inconnu. La pauvreté n'a pas de passé. «Le jour où dans le cimetière de province... X. découvrit que son père était mort plus jeune qu'il n'était lui-même à ce moment-là... que celui-ci qui était couché là était son cadet depuis 2 ans bien qu'il y eût 35 ans qu'il fût étendu là... Il s'aperçut qu'il ignorait tout de ce père et décida de le retrouver...»
Naissance dans un déménagement.
2e partie. L'enfance (ou mêlée à la première partie) Qui suis-je?
3e partie. L'éducation d'un homme. [...] (C3, 96-97)

すなわち，第一パラグラフにある，父の墓に参った折，父が自分より若くして死んだことを知り，愕然となって，自分が全く知らなかった「父の探索」に向かう過程は遺稿の第一部2章で述べられることとなるし，「貧しさは過去をもたない」[3]との言葉は，*Le Premier Homme* の第一部6章で述べられる「貧者の記憶」[4]の曖昧さと呼応している[5]。また，第二パラグラフ「引っ越しの最中での誕生」は第一部1章で詳述されることとなる。

この覚書では「第二部。少年時代(...)私は誰だろう。」となっているが，遺稿においても，主人公は「父の探索」から自己の少年時代の追想へ，すなわち自己の探索へと向かうのであった。

さらに「第三部。一人の人間の教育」という記述も，遺稿の，小学校でベルナール先生と出会い，奨学生試験に合格し，リセへと進学していく主人公の歩みと合致している。

このように，ここにはすでに，遺稿とほぼ同じ構成のメモが記されているのだが，しかしながら，この段階では，タイトルが定まってはいないことに注意を払う必要があろう。

これに続いて，次のような，父の探究と母の沈黙に関する断章がある。

Ô père! J'avais cherché follement ce père que je n'avais pas et voici que je découvrais ce que j'avais toujours eu, ma mère et son silence. (C3, 97)

さらにそれに続いて，次のようなメモもみつかる。

Id. Enfance pauvre. Vie sans amour (non sans jouissances). La mère n'est pas une source d'amour. Dès lors, ce qu'il y a de plus long au monde c'est d'apprendre

à aimer. (C3, 98)

詳しくは後に述べるが，今は「貧しい少年時代」とした後で，メモがとられている点をおさえておきたい。

後に*Le Premier Homme*へと発展するこれら3つの連続する断章の少し後に，具体的なプランとともに*Le Premier Homme*というタイトルが，あの1947年の挿入されたプラン以来初めて出てくる。大久保敏彦氏も指摘しているように[6]，*Le Premier Homme*の意識的な形成は1953年のこの時と考えて間違いないだろう。

Le Premier Homme.

Plan?

1) Recherche d'un père.

2) Enfance.

3) Les années de bonheur (malade en 1938). L'action comme une surabondance heureuse. Puissant sentiment de libération quand c'est fini.

4) Guerre et résistance (Bir Hakeim et journal clandestin alternés).

5) Femmes.

6) Mère.

[...] (C3, 100)[7]

2

ところで，『夏』（1939年から1953年までのエッセーを収録。1954年刊）までのカミュ研究書（『海と牢獄』初版）を上梓したロジェ・キーヨにあてて，カミュは次のような手紙を送っている。

Votre étude a toute raison de s'arrêter à *l'Été*, et à ma quarantième année, puisque, par un pur hasard d'ailleurs, ces dates coïncident évidemment avec une sorte de charnière de mon travail et de ma vie. (I, 2037)

このようにカミュは，1953年，40歳という年が自分の「仕事ならびに生活のある種の転換点と明らかに一致したものとなっている」との証言を残していたのだが，『反抗的人間』の刊行(51年)，サルトルとの論争ついで訣別(52年)に続くこの年が，事実，カミュにとって決定的な節目の年になっていることが，最近の研究で明らかになってきた。

私生活面では，この53年秋，妻フランシーヌが病に倒れたことがあげられよう。この件に関しては，ロットマンに手短かな言及がなされていたが[8]，1996年に刊行されたオリヴィエ・トッドによる伝記に詳しく述べられており[9]，彼の大きな功績の一つだろうが，自殺未遂すら引き起こした，一年余にわたる妻の心の病が，カミュの心に大きな痕跡となって残ることになり[10]，『転落』の身投げする女のモデルは他ならぬ妻フランシーヌだとされている程である[11]。カミュは深刻な執筆不能状態に陥る。1954年「12月1～3日」の日付の打たれた『手帖』には次のように認められている。

> Un an que je n'ai pas travaillé, que je n'ai pu travailler alors que dix sujets étaient là, dont je sais qu'ils sont exceptionnels, et que je ne pouvais aborder. Un an ces jours-ci, et je ne suis pas devenu fou. (*C3*, 138)

このような執筆不能の時期だったにもかかわらず，仕事面でも「転換点」とした理由は，すでにあげた*Le Premier Homme*のタイトルと具体的な構想が浮かんだのも1953年だったからに他ならないのではなかろうか。マリア・カザレスは，1953年の「ある夜—おそらくは10月17日土曜から18日日曜にかけて—彼（カミュ）は寝つかれず，朝の4時に起きて，次の小説のテーマを考えた」[12]との証言を残しているが，この小説のテーマこそ彼が『手帖』に書き留めた*Le Premier Homme*の具体的構想と考えて間違いあるまい。というのも，先程引用した*Le Premier Homme*のタイトルと具体的な構想が記されているのは『手帖』の100ページだが，102ページに「53年10月」の日付が打たれているからである。

このようにカミュ40歳[13]，1953年はカミュにとって大きな転機となっているのである。

ところで*Le Premier Homme*は，カミュにあっては珍しく，「日付型」の小説となっている[14]。すなわち，*Le Premier Homme*の第一部1章は「1913年秋のある夜」«une nuit de l'automne 1913»(*PH*, 14)のことであり，続く2章は「40年後」«Quarante ans plus tard»(*PH*, 25)という言葉で始まっており，第一部2章以降では，語り手の現在時は1953年，40歳の主人公ジャック・コルムリが過去を追想する形で物語は展開している。この設定にも，1953年，40歳という*Le Premier Homme*の着想を得た年へのカミュの強い拘りを見て取ることができるのではないだろうか。というのも，自伝的色彩の強いこの作品にあって，主人公ジャック・コルムリは父の墓参を40歳で行う設定になっているのだが，ところが，実際にカミュが，サン＝ブリューに父の墓参りをしたのは，1953年ではなく，47年夏のことなのである[15]。この伝記的事実のすりかえに，あくまでも40歳を「転換点」として捉え

ようとするカミュの意識がみてとれるからである[16]。

3

それでは，いつ書かれたのだろうか。

その後，1956年までの『手帖』には，その大部分は後の遺稿に取りあげられることはないが，*Le Premier Homme* に関するメモが散見されることとなる[17]。

1954年3月には，第三者に初めて *Le Premier Homme* の構想を打ち明けている。

> J'imagine donc un «premier homme» qui part à zéro, qui ne sait ni lire, ni écrire, qui n'a ni morale, ni religion. Ce serait, si vous voulez, une éducation , mais sans éducateur.[18]

ところが，執筆にはなかなか取りかかれなかった模様である。グルニエとの往復書簡をみても，*Le Premier Homme* 執筆は『追放と王国』(1957年3月刊)の完成を待ってのことだったことがわかる[19]。『追放と王国』完成後も，ノーベル賞受賞狂騒曲，1957年12月からおよそ半年にわたる[20]病気（呼吸困難の発作，密室恐怖症，鬱病），『悪霊』の翻案を中心とした演劇活動，旅行等に忙殺され，*Le Premier Homme* の執筆にはかかれなかったようだ。1957年と1958年の『手帖』に *Le Premier Homme* に関する覚書がまったく見当たらぬことも，この時期，執筆できなかったことを裏付けてくれているように思われるが，以下，具体的な証言をいくつかあげておく。

たとえば，1958年7月25日，「何もしない」«Rien.» で始まる『手帖』には次のような記述がある。

> Ah! si la force de travail me revenait, ce serait la lumière, enfin. (C3, 250)

また，「8月15，16，17日」の『手帖』からも，2週間にわたって「虚ろな」状態だったことがわかる。

> Toute cette période depuis le 2 est en fait vide. On ne peut écrire sans retrouver la vitalité et l'énergie. (C3, 254)

この時期，8月8日，カトリーヌ・セラーズに次のように書き送ってもいる。

Je ne travaille toujours pas, mais je dois à la vérité de dire que je sens des mouvements sourds en moi [...]. mais il faut attendre.[21)]

1958年9月30日(C3, 258), カミュはルールマランに家を購入し[22)], パリの喧騒を逃れ, 執筆に専念する態勢をようやく整える。娘カトリーヌ・カミュによれば, カミュが*Le Premier Homme*を書いたのは「その生涯の最後の年」[23)]とのことである。1959年, カミュはルールマランに, 春, 夏, 冬と3度滞在している。4月28日, ルールマランに来たカミュは, 過去を清算し, 再出発の決意を『手帖』に次のように認めている。

J'ai voulu vivre pendant des années selon la morale de tous. Je me suis forcé à vivre comme tout le monde, à ressembler à tout le monde. J'ai dit ce qu'il fallait pour réunir, même quand je me sentais séparé. Et au bout de tout cela ce fut la catastrophe. Maintenant j'erre parmi des débris, je suis sans loi, écartelé, seul et acceptant de l'être, résigné à ma singularité et à mes infirmités. Et je dois reconstruire une vérité — après avoir vécu toute ma vie dans une sorte de mensonge. (C3, 266)

そして,「5月」の日付の打たれた断章から, この春の滞在時に*Le Premier Homme*の第一部が書き進められたことがわかる。

Travail repris. Ai avancé dans première partie *Premier Homme*. Reconnaissance à ce pays, à sa solitude, à sa beauté. (C3, 267)

とはいえ, あまり筆は進まなかったようだ。この春の滞在時に書かれたのは, *Le Premier Homme*の第一部1章だけだったのではあるまいか。というのも, 1959年夏, ミーと思われる女性にカミュが「新しい小説の冒頭部を読んでやることとなる」«Maintenant, il allait lui lire le début de son nouveau roman.»[24)]のだが, 近接未来のこの表現だけからでは, はたしていつ「読んでやること」となったのかは断定できないものの, 冒頭部だけ先に, 第1回滞在時に書かれたのではないかと推測されるからである[25)]。父に焦点化された冒頭部の語りの特異性の理由はその点に求められるのではないだろうか。いずれにしても, 最初の2度の滞在は, あまり実り豊かなものではなかったようだ。2度目の滞在も終わった9月28日,「今, 小説を書いているのですか」とのロベール・マレの質問にカミュは次のように答えているからである。

— Je n'aime pas parler de ce que je suis en train d'écrire. Je ne sais pas encore ce que ce sera. Ça ne me satisfait pas. J'en ai détruit des pages et des pages. Ça avance lentement.[26)]

それに対し，11月15日からクリスマスまでの，孤独な生活は実り多かったようである。証言を二つばかりあげてみる。まず，11月26日と推定されるカトリーヌ・セラーズ宛の手紙の一節。

La solitude ici est un peu écrasante. L'hiver, le village vide est fermé, la campagne nue, et sauf pour le déjeuner je ne vois personne de la journée. Ce sont de bonnes conditions de travail, et, en effet, je travaille.[27)]

クリスマス休暇で家族がやってくると，来客にも悩まされ，カミュは執筆を断念することとなるが[28)]，1か月余の「修道士の生活」を総括して，12月28日，カミュはジャン・グルニエに次のように書き送っている。

Depuis le 15 novembre, je me suis retiré ici pour travailler et j'ai en effet travaillé. Les conditions de travail pour moi ont toujours été celles de la vie monastique : la solitude et la frugalité.[29)]

遺稿の第一部6章には主人公ジャックの初聖体拝領式が描かれているが，この3度目の滞在時に近所の夫人（ジヌー夫人）に「初聖体拝領式はいつやるのですか」とカミュが質問していることからも[30)]，この部分も含め *Le Premier Homme* の大部分はおそらくは，晩年のこの3度目の滞在中に，短期間に集中的に書かれたものであろう。

4

Le Premier Homme の本格的な着想の時期は1953年であることは，異論がないにしても，『手帖』をみれば，53年以前のメモが *Le Premier Homme* の草稿に導入されていることに気付く[31)]。すでに1942年の『手帖』には次のような記述がある。

Enfance pauvre. L'imperméable trop grand — la sieste. La canette Vinga — les dimanches chez la tante. Les livres — la bibliothèque municipale. Rentrée le soir de Noël et le cadavre devant le restaurant. Les jeux dans la cave (Jeanne, Joseph

et Max). Jeanne ramasse tous les boutons, «c'est comme ça qu'on devient riche». Le violon du frère et les séances de chant — Galoufa. (C2, 41)

このメモのほとんどすべてが*Le Premier Homme*で再び取りあげられることとなる。すなわち,「だぶだぶのレインコート」は*Le Premier Homme* の83ページで（以下，ページのみ記す),「昼寝」はpp.41-45で,「カネット・ヴァンガ」はpp.46-48で,「伯母の家での日曜日」はpp.123-124で,「本—私立図書館」はpp.224-229で,「クリスマスの夜の帰宅とレストランの前の死体」はpp.127-128で,「地下室での遊び」はpp.48-51で,「兄のヴァイオリンと歌の催し」はpp.88-90で,「ガルーファ」はpp.132-135で[32]取りあげられることとなるのである。ただし,「地下室での遊び」にはジョゼフとマックスは登場するものの,「ジャンヌ」は姿を消しているし,「ジャンヌはありとあらゆるボタンを集める。<こんな風にして，お金持ちになるのね>」との記述もない。少女消去の理由は，«*Le Premier Homme*» というタイトルに含意される「男」と深くかかわているように思われる[33]。

さらに，アコー叔父に関する記述もみつかる。これも1942年末と推定されるものである。

Enfance pauvre. Différence essentielle quand j'allais chez mon oncle : chez nous les objets n'avaient pas de nom, on disait : les assiettes creuses, le pot qui est sur la cheminée, etc. Chez lui : le grès flambé des Vosges, le service de Quimper, etc. — Je m'éveillais au choix. (C2, 62)

このメモは，裕福な叔父の家についての記述として，*Le Premier Homme*で次のように活かされることとなる。

Chez lui, on disait «le vase qui est sur la cheminée», le pot, les assiettes creuses, et les quelques objets qu'on pouvait trouver n'avaient pas de nom. Chez son oncle, au contraire, on faisait admirer le grès flambé des Vosges, on mangeait dans le service de Quimper. (*PH*, 62)

興味深く思われるのは，具体的な構想の得られた53年より10年以上前の42年の『手帖』のメモが，*Le Premier Homme*に作品化されているという事実である[34]。つまり，*Le Premier Homme*に導入されることになる少年時代の思い出がメモの形でとられていたこと，カミュに少年時代への拘りがあったことである。今一つ，興味深いのは，このメモが「貧しい少年時代」という作品構想のためのものであるという点である。

1946年になると，「正義」(justice)への関心の高まりからか，「貧しい少年時代」は『正義に関する小説』に組み込まれることになる。そして今一つ注意を払わなくてはならぬのは，1942年では「貧しい少年時代」のジャンルは不明だったが，サロッキもいうように[35]，ここで初めて虚構化された点である。

Roman Justice.
1) Enfance pauvre — injustice est naturelle. [...] (*C2*, 173)

『正義に関する小説』に組み入れられた「貧しい少年時代」のメモの中にも，後に*Le Premier Homme*に取りあげられるものがみつかる。次の覚書も1946年のものである。

Roman. Enfance pauvre.«J'avais honte de ma pauvreté et de ma famille (Mais ce sont des monstres!) Et si je puis en parler aujourd'hui avec simplicité c'est que je n'ai plus honte de cette honte et que je ne me méprise plus de l'avoir ressentie. Je n'ai connu cette honte que lorsqu'on m'a mis au lycée. Auparavant, tout le monde était comme moi et la pauvreté me paraissait l'air même de ce monde. Au lycée, je connus la comparaison.
Un enfant n'est rien par lui-même. Ce sont ses parents qui le représentent.
(*C2*, 177)

この引用の第一パラグラフの内容は，*Le Premier Homme*の第二部1章で活かされることになるし，第二パラグラフ冒頭の一文は，«Un enfant n'est rien par lui-même, ce sont ses parents qui le représentent.» (*PH*, 187)と句読点を変えただけで*Le Premier Homme*に使われることとなる。

さらに1947年の『手帖』には次のような断章もみつかる。

Comment faire comprendre qu'un enfant pauvre peut avoir honte sans avoir d'envie. (*C2*, 217)

大久保敏彦氏も指摘しているように[36]，これは「貧しい少年時代」のためのものであろうし，このメモもまた，今しがたあげた1946年の覚書の第一パラグラフ同様，*Le Premier Homme*で用いられることとなる。

1951年の『手帖』にも，先にあげたアコー叔父の家に比べてであろう，自分の家にいかにものがないか，「必要最小限度」のものしかないかが，小説のための覚書として書き留められている。これもまた*Le Premier Homme*で用いられることと

なるものだ(*PH*, p.62 参照)。

Roman. Ce qui le frappait alors c'était à quel point il y avait peu d'objets chez lui. Le nécessaire, jamais mot n'avait été mieux illustré. Quand sa mère vivait dans une chambre, elle n'y laissait aucune trace sinon, parfois, un mouchoir.(*C3*, 29)

このように,『手帖』に見られる「貧しい少年時代」のメモは，カミュが自伝的世界の虚構化をずっと考えていたことを裏付けてくれているのである。

また，今しがたあげた引用の前，同じく1951年の『手帖』には，小説のための覚書として，初めて父の墓参りをした息子が，父が自分より若くして亡くなったことを知る断章が認められている。

Roman. Jeanne P. et son geste machinal.

Id. Les cimetières militaires de l'Est. À 35 ans le fils va sur la tombe de son père et s'aperçoit que celui-ci est mort à 30 ans. Il *est devenu l'aîné*. (*C3*, 27-28)

このように,父の墓参と父よりも生き長らえたことを知る男の物語についても，実際には1953年よりも以前からすでに，カミュは虚構化を考えていたのである。

5

ところで，*Le Premier Homme* が処女作『裏と表』(1937)の世界へ回帰した作品であることは異論の余地のないことである。以下，このことを再確認しておきたい。

『追放と王国』刊行の翌年にあたる1958年,『裏と表』の再刊に際し，カミュは序文を付け加えた。その序文は,「カミュの最もすぐれた肖像画」[37]ともいわれているものだが，その中でカミュは『裏と表』こそが自らの「源泉」«source»(II, 6)であると断言し，いつの日か「自分が夢見ている作品」を,「いずれにせよ,『裏と表』に似ていて，ある愛のかたちについて語る」(II, 12)作品を書くだろうと述べ,『裏と表』の世界への回帰の決意を表明していたのであった[38]。

Simplement, le jour où l'équilibre s'établira entre ce que je suis et ce que je dis, ce jour-là peut-être, et j'ose à peine l'écrire, je pourrai bâtir l'œuvre dont je rêve. Ce que j'ai voulu dire ici, c'est qu'elle ressemblera à *l'Envers et l'Endroit*, d'une façon ou de l'autre, et qu'elle parlera d'une certaine forme d'amour. (II, 12)

*Le Premier Homme*が中核となる「ネメシスの神話」の系列は「愛」をテーマとするものであり[39]，カミュがここで「夢見ている作品」が*Le Premier Homme*を指すことは衆目の一致するところとなっている[40]。

ところで，『裏と表』同様アルジェで少部数刊行された，第二番目のエッセー『結婚』(1939)については，1945年，シャルロによってパリとアルジェで再刊されていたのだが，それではなぜ『裏と表』は長い間，再刊されなかったのだろうか。その理由について，カミュは，「私の心にもっとも密着した主題」を書いた『裏と表』の「証言の価値」は認めつつも，「その形式がつねに不器用に思われた」(II, 5)からだとしている[41]。

それでは，なぜ再刊したのだろう。その理由についても「『裏と表』再刊への序文」に記されている。それはまず，「この本はすでに存在しているが，少部数なので，本屋が非常な高値をつけている。どうして，金持ちの読者にだけ，この本を読む権利があるのだろうか。」(II, 13)との読者の要望に応えようとしたものであった。第二には，そして言うまでもなくこれが最大の理由であるが，「源泉」に，「自己の中心」に回帰し，自己を見つめ直す必要性をカミュが痛切に感じていたからに他ならない。

> Et puis un temps vient toujours dans la vie d'un artiste où il doit faire le point, se rapprocher de son propre centre, pour tâcher ensuite de s'y maintenir. C'est ainsi aujourd'hui et je n'ai pas besoin d'en dire plus. (II, 13)

再刊の理由をこのように説明した後，カミュは「いつの日か『裏と表』を再び書くことが出来なければ，私は決して何ものにも到達できないだろう」とまで言い切っている。

> Si, malgré tant d'efforts pour édifier un langage et faire vivre des mythes, je ne parviens pas un jour à récrire *l'Envers et l'Endroit*, je ne serai jamais parvenu à rien, voilà ma conviction obscure. (II, 13)

だが，この思いは，晩年，唐突に現れ出たものではない。「源泉」への回帰を表明すべく，形式への不満にもかかわらず，カミュは『裏と表』の再刊に思いをめぐらせ，「再刊への序」を認めることになったのだが，その時期は早い。

「再刊への序文」の構想つまり『裏と表』の再刊計画は随分以前に遡る。1949年と推定される『手帖』にすでに「『裏と表』への序文」として長い記述が認められているが(C2, pp.297-298 参照)，この覚書は，文体のうえではかなり変化するもの

の，その大部分は内容的にはほぼそのままの形で1958年の「再刊への序文」で取りあげられることとなるものである。一節だけあげておく。

> Le jour où l'équilibre s'établira, ce jour-là, j'essaierai d'écrire l'œuvre dont je rêve. Elle ressemblera à *L'Envers et l'Endroit*, c'est-à-dire qu'une certaine forme d'amour y sera mon tuteur. (*C2*, 298)

さらに，1951年の『手帖』にも，序文のための覚書が2つでてくる(*C3*, p.13ならびにp.18参照)。これら3つの覚書の存在については，ロジェ・キーヨがすでに指摘していたが(II, pp.1179-1180参照)，1951年の『手帖』にある「大事には主義主張を貫け。小事には寛容でこと足りる」«Il faut mettre ses principes dans les grandes choses. Aux petites, la miséricorde suffit.»(*C3*, 19)という断章も，ほぼそのままの形で，「再刊への序文」に盛り込まれることとなる[42]。

キーヨは，「再刊への序文」の決定稿が正確にいつ書かれたかは不明だが，タイプ原稿を目にした1954年には完成していたとしている(II, p.1180参照)。だとすれば，「再刊への序文」もまた「転換点」たる40歳の折に書かれたものだろうか。この件に関しては，現在のところ，それを裏付けてくれる資料もなく，残念ながら仮説の域をでない。断定できること，それは「再刊への序文」刊行の10年近く前の1949年からすでに，『裏と表』の世界に回帰する必要性を，もう一度『裏と表』を書く必要性をカミュが感じていたことである。

6

では，処女作『裏と表』とはカミュにとってどのような作品であったのだろうか。ここで，『裏と表』出版に関する経緯を振り返っておこう。

よく知られているように，1935年5月，『手帖1』の冒頭に，カミュは「息子のありとあらゆる感受性を作り上げる」「息子が母親に抱く奇妙な感情」(*C1*, 15)（強調カミュ）という『裏と表』の主題を書きつけ，さらに続けて当時の自己の芸術観と創作への決意とを次のように披瀝していた。

> L'œuvre est un aveu, il me faut témoigner. Je n'ai qu'une chose à dire, à bien voir. C'est dans cette vie de pauvreté, parmi ces gens humbles ou vaniteux, que j'ai le plus sûrement touché ce qui me paraît le sens vrai de la vie. Les œuvres d'art n'y suffiront jamais. L'art n'est pas tout pour moi. Que du moins ce soit un moyen. (*C1*, 16)

「作品は告白である」と，形式よりも内容をと，自分自身に言い聞かせ，2年後カミュは自伝的エッセー『裏と表』を世に問うこととなる。だが，おそらくは出版以前からカミュは形式面の不備を十二分に自覚していた。

というのも，「5月」の日付しか打たれておらず，それ故刊行(1937年5月10日)直前か直後かは断定できないが[43]，形式の不備を自覚した，いわば一種の弁明ともいえる「序文」の計画の記述が『手帖』に見受けられるからである。

> Mai.
>
> *Projet de préface pour* L'Envers et l'Endroit.
>
> Tels qu'ils sont présentés, ces essais, pour beaucoup sont informes. Ce qui ne vient pas d'un mépris commode à l'égard de la forme — mais seulement d'une insuffisante maturité. [...] (*C1*, 48)

このように，形式面の不備を，内容は肯定しながらも形式面を軽視した過誤を，おそらくは刊行直前からカミュは悟っていたのである。私的な『手帖』に記しているだけではない。処女作品の欠点を自覚しつつカミュは，芸術作品を書くという将来の夢を親友に打ち明けてもいる。1937年7月8日付のメゾンスールへの手紙をみてみよう。

> Plus tard j'écrirai un livre qui sera une œuvre d'art. Je veux dire bien sûr une création, mais ce seront les mêmes choses que je dirai et tout mon progrès, je le crains, sera dans la forme — que je voudrai plus extérieure. (II, 1219)

この本とは，たとえば，ほぼ完璧に虚構化された『異邦人』を指すのではなく，『裏と表』を書き直し(récrire)た作品，つまり「芸術という迂回路をとおして」(II, 13) 自らの過去を語る「＜直接的な＞小説」[44]ではないのか。

してみると，比較的はやい時期からカミュは『裏と表』を書き直した形の本を出版したいという気持ちを持ち続けていたのではないか，「貧しい少年時代」とはそのような書物ではなかったのか。そして，「貧しい少年時代」は，『正義に関する小説』に組み込まれ，そして最終的に*Le Premier Homme* へと至ったのではないのだろうか。すでにみたように，*Le Premier Homme*のタイトルが現れる前の1953年の『手帖』に，「貧しい少年時代」という前置きとともに，後に*Le Premier Homme*に導入されることとなるメモがとられていたことも，このことを裏付けてくれているように思われるのである。

したがって，*Le Premier Homme*が『裏と表』の世界へ回帰した作品だとすれば，

*Le Premier Homme*というタイトルでの作品構想は1953年だとしても，その源は処女作「裏と表」刊行直前にまで遡ることができ，「裏と表」の世界の再作品化をカミュはずっと「夢見て」いたと考えることができよう。「裏と表」の世界の再作品化，つまり，*Le Premier Homme* 執筆はカミュのライフ・ワークだったといえるのである[45]。

注

アルベール・カミュの以下の諸作品を次のように略記し，ページは括弧内に直接示す。

I : *Théâtre, récits, nouvelles*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1967.
II : *Essais*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1965.
C1 : *Carnets : mai 1935-février 1942*, Gallimard, 1971.
C2 : *Carnets : janvier 1942-mars 1951*, Gallimard, 1964.
C3 : *Carnets : mars 1951-décembre 1959*, Gallimard, 1989.
PH : *Le Premier Homme*, Gallimard, «Cahiers Albert Camus 7», 1994.

1) Herbert R. LOTTMAN, *Albert Camus*, Traduit de l'américain par Marianne VÉRON, Seuil, 1978, p.439 参照。

2) Albert CAMUS, *Journaux de voyage*, Gallimard, 1978, p.7 参照。

3) 「手帖」の訳については，「カミュの手帖」，大久保敏彦訳，新潮社，1992，を参照させていただいた。また，「手帖1」「手帖2」については，高畠正明訳，「太陽の讃歌　カミュの手帖—1」，新潮社，1970ならびに高畠正明訳，「反抗の論理　カミュの手帖—2」，新潮社，1970もあわせて参照させていただいた。

4) *Le Premier Homme*の訳については，「最初の人間」，大久保敏彦訳，新潮社，1996，を参照させていただいた。

5) «Elle disait oui, c'était peut-être non, il fallait remonter dans le temps à travers une mémoire enténébrée, rien n'était sûr. La mémoire des pauvres déjà est moins nourrie que celle des riches, elle a moins de repères dans l'espace puisqu'ils quittent rarement le lieu où ils vivent, moins de repères aussi dans le temps d'une vie uniforme et grise. Bien sûr, il y a la mémoire du cœur dont on dit qu'elle est la plus sûre, mais le cœur s'use à la peine et au travail, il oublie plus vite sous le poids des fatigues. Le temps perdu ne se retrouve que chez les riches.» (*PH*, 79)

6) 大久保敏彦，「訳者あとがき」，「最初の人間」，前掲書，p.321 参照。

7) これに続く断章も，後に *Le Premier Homme* へと発展するものだ。

«*Le Premier Homme.*

Recherche d'un père.

L'hôpital. La mère (et ce papier de la mairie qu'on apporte aux deux femmes analphabètes qui pèlent des pommes de terre sur le palier, et il faut faire entrer l'adjoint au mairie et lui rendre le papier pour qu'il le lise), la presse, Cheragas, etc. Il voit se dessiner un peu le père. Puis tout s'efface. En définitive il n'y a rien.

C'était toujours ainsi sur cette terre, où, il y a 50, 70 ans.....» (C3, 100-101)

8) Herbert R. LOTTMAN, *op.cit.*, p.536.

9) Olivier TODD, *Albert Camus une vie*, Gallimard, 1996, pp.584-594 参照。

10) フランシーヌが激しい精神不安定に陥った日付(12月28日)を，4年後も，カミュは忘れてはいない。C3, p.215 参照。

11) Olivier TODD, *op. cit.*, pp.637-638 参照。

12) Herbert R. LOTTMAN, *op. cit.*, p.538 参照。

13) カミュは「40歳」に拘っているが，しかしながら，カミュの生まれたのは1913年11月7日であり，厳密に言えば，*Le Premier Homme* の具体的構想をカミュが得たのは，40歳になる直前のことではある。

14) «Les curieux événements qui font le sujet de cette chronique se sont produits en 194., à Oran. »(I, 1219)で始まる『ペスト』は例外的である。ただ，『ペスト』では「194＊年」とぼかされており，正確な日付を打つことは不可能である。

15) Herbert R. LOTTMAN, *op. cit.*, p.440 参照。

16) *Le Premier Homme*への序曲ともいえる『追放と王国』所収『口をつぐむ人びと』の主人公イヴァールも40歳という設定になっている。I, p.1597 参照。

17) 遺稿に盛り込まれる覚書といっては，母に父について訊ねるもの(C3, pp.153-154 参照)とエチエンヌ叔父に関するもの (C3, p.176 ならびに p.192 参照)だけである。

18) フランク・ジョットランのインタビューに答えたもの。Franck JOTTERAND, «Entretien avec Albert Camus», *la Gazette de Lausanne*, 27-28 mars 1954, p.9, Lausanne. なお，このインタビューはカミュが初めて第三者に *Le Premier Homme* の構想を明かしたものとしてきわめて重要なものであるが，資料入手にあたっては，フランス留学中だった高塚浩由樹氏に多大のご尽力をいただいた。誌面をかりて，お礼申し述べたい。

19) 詳しくは，拙稿，「『追放と王国』にみられる *Le Premier Homme* の影—『生い出ずる石』を中心に—」，『フランス文学研究 15』，広島大学フランス文学研究会，1996，pp.31-32 を参照されたい。

20) C3, pp.215-221 参照。

[21] Olivier TODD, *op. cit.*, p.741.

[22] ロットマンによれば，10月18日契約書に署名している。Herbert R. LOTTMAN, *op. cit.*, p.642 参照。

[23] «Bulletin d'information», N°33, Société des études camusiennes, mai, 1994, p.18.

[24] Herbert R. LOTTMAN, *op. cit.*, p.661.

[25] ロットマンは2度目の滞在の「8月後半になって，やっと最初の数ページができあがった」のではないかと推測している。*Ibid.*, p.661 参照。

[26] Robert MALLET, *Présent à la vie, étranger à la mort* (Pages de Journal) in *Hommage à Albert Camus*, Gallimard, 1967, p.51.

[27] Olivier TODD, *op. cit.*, p.749.

[28] *Ibid.*, pp.751-752 参照。

[29] *Correspondance Albert Camus — Jean Grenier 1932-1960*, Gallimard, 1981, p.231.

[30] Olivier TODD, *op. cit.*, p.750 参照。

[31] 以下問題とする『手帖』の記述について，サロッキは次のように指摘しているが，分析がなされているわけではない。

> Très tôt dans les *Carnets* des esquisses paraissent de ce qui deviendra *Le Premier Homme*. En 1942 on lit : "*Enfance pauvre*. L'imperméable..."etc. Un peu plus tard(II ,62) : "*Enfance pauvre*. Différence essentielle..." Il ne s'agit pas encore, semble-t-il, d'un "roman". Le terme survient dans un projet de 1946 (II ,173) qui commence ainsi :
>
> "Roman Justice
> 1)Enfance pauvre - injustice est naturelle"...

(Jean SAROCCHI, *Le Dernier Camus ou le premier homme*, Nizet, 1995, p.22.)

[32] *PH*, p.51 の脚注にもある。

[33] カミュにおける「男」の意味については，拙稿，「アルベール・カミュにおける＜男＞について」，『フランス語フランス文学研究』，N°67，日本フランス語フランス文学会，1995，pp.71-81 を参照されたい。

[34] ジャクリーヌ・レヴィ＝ヴァランシによれば，『裏と表』以前の，ごく初期の草稿も，*Le Premier Homme* に導入されているということだ。«Il(=Camus) reprend aussi des textes qui remontent bien avant. Il y a des textes qui sont parmi les tout premiers manuscrits de Camus, même inédits, avant *L'Envers et l'Endroit*. Il y a des phrases qui se retrouvent telles quelles dans *Le Premier homme*.» («Bulletin d'information», N°33, *op. cit.*, p.18.)

[35] 注31 参照。

[36] 『カミュの手帖』，大久保敏彦訳，前掲書，p.327 参照。

[37] Pol GAILLARD, *Albert Camus*, Bordas, 1982, p.30.

[38] 『裏と表』の訳については，『裏と表』，高畠正明訳，『カミュ全集1』，新潮社，1972を参照させていただいた。

[39] «Le troisième étage, c'est l'amour : Le Premier Homme [...]»(C3, 187)

[40] 例えば，ロジェ・キーヨは，「『裏と表』再刊への序文」の一節を引用した後，次のように述べていた。«Tel était sans doute l'objectif du *Premier Homme*. »(Roger QUILLIOT, *La Mer et les prisons*, Gallimard, 1970, p.32.) もちろん，1956年刊行の *La Mer et les prisons* 初版にはこの記述はない。

[41] «Je ne renie rien de ce qui est exprimé dans ces écrits, mais leur forme m'a toujours paru maladroite.» (II, 5)

[42] 句読点の異同が認められるだけである。«Il faut mettre ses principes dans les grandes choses, aux petites la miséricorde suffit. »(II, 8)

[43] もっとも，1937年9月までの『手帖』にはカミュが手を加えたとされており，配列に絶対的な信をおけないとのことであるから(Herbert R. LOTTMAN, *op. cit.*, p.99参照)，「序文」の構想メモは『裏と表』刊行前に書かれたと考えてよいだろう。

[44] カミュは *Le Premier Homme* を「<直接的な>小説」(un roman«direct») と形容している。*Correspondance Albert Camus — Jean Grenier, op.cit.*, p.201.

[45] 1959年秋，カミュはメゾンスールに *Le Premier Homme* は「自分の真の作品」であると言っている。«Il parla aussi à Maisonseul de son roman en cours, lui confiant qu'à l'âge de vingt ans il s'était fixé un programme de travail dont il n'avait encore accompli qu'un quart, et que son œuvre véritable restait à faire. »(Herbert R. LOTTMAN, *op. cit.*, p.663.)

Le processus d'élaboration du *Premier Homme*

Yosei MATSUMOTO

Camus confesse que sa «quarantième année » coïncide avec «une sorte de charnière de [s]on travail et de [s]a vie». En effet, en 1953, sa femme Francine est tombée malade et a essayé de se suicider, ce qui projette une ombre sur la vie de l'écrivain. Quant à son travail, cette date correspond à la première conception concrète du *Premier Homme* qu'il va écrire peut-être dans l'année qui a précédé sa mort.

Cependant, avant 1953, on peut trouver des notes que reprend *le Premier Homme,* mais qui étaient destinées à ce moment-là à l'ouvrage intitulé *Enfance pauvre,* ouvrage qui allait être incorporé à *Roman Justice.* Cela prouve que sa volonté d'écrire son enfance est bien antérieure à la conception concrète du *Premier Homme* et qu'elle est une sorte de hantise pour Albert Camus.

Or, il est indéniable que *le Premier Homme* marque un retour à sa propre source, c'est-à-dire au monde de *l'Envers et l'Endroit,* sa première œuvre, que Camus a rééditée avec une préface en 1958. Cependant, un peu avant la parution de *l'Envers et l'Endroit* en 1937, Camus avait déjà voulu ajouter une préface pour s'expliquer sur les maladresses de forme, et dès 1949 il envisageait une préface à la réédition de *l'Envers et l'Endroit* pour exprimer sa volonté d'«écrire l'œuvre dont [il] rêve.»

Ainsi, le processus d'élaboration du *Premier Homme* remonte-t-il jusqu'à l'époque de la publication de *l'Envers et l'Endroit,* et Camus a toujours songé à récrire son enfance, que ce soit à travers la conception d'*Enfance pauvre,* de *Roman Justice* ou d'une préface à la réédition de *l'Envers et l'Endroit.* Cela atteste que *le Premier Homme,* dans lequel Camus y a enfin réussi, serait bien une œuvre de toute sa vie.